

## 頸部痛との鑑別を要した犬の中耳炎の3例

水谷 到 Itaru MIZUTANI<sup>1)</sup>、海津 直美 Naomi KAIZU<sup>1)</sup>

洞田 知嗣 Tomotsugu HORADA<sup>1)</sup>、中桐 由布 Yu NAKAGIRI<sup>1)</sup>

他院にて頸部痛と診断された犬3例が、ビデオオトスコープを用いた耳道内視鏡検査にて中耳炎が関連した疼痛であることが判明。3例とも異なる病態による中耳炎であるが、ビデオオトスコープを用いた治療により比較的経過は良好である。

**Keywords**：犬、中耳炎、頸部痛、ビデオオトスコープ

### はじめに

中耳炎は人医療ではすでに広く認知された病態であり、大きく分けて滲出性中耳炎・急性中耳炎・慢性化膿性中耳炎に分類される。犬の中耳炎は、初期の段階で診断されることは少なく、ほとんどが外耳炎として長期の治療経過を経ている。犬の中耳炎の発生頻度は意外に多く、急性外耳炎症例の約16%、慢性外耳炎症例の50-80%で中耳炎が認められたとの報告がある。中耳炎の臨床症状としては、慢性外耳炎の症状（耳漏など）に加えて、病態が進行した症例や耳道の線維化、骨化が存在する症例では耳道の触診時に強い痛みを示すこともある。今回、他院にて頸部痛と診断され緩和治療を受けていた犬3例が、当院で実施したビデオオトスコープ（以下、VOSとする）検査によって各々の病態の中耳炎であることが判明したため、その概要を報告するとともに、中耳炎の診断の重要性について考える。

### 症 例

**症 例①**：柴犬、オス、10歳齢、9kg。

3週間前からの性格の変化、頸部周囲の痛み、元気食欲の低下を主訴に来院。じっとして動かたがらず、触ろうとすると咬もうとするとのこと。他院にて頸部痛と診断。フィロコキシブ（プレビコックス錠）が処方されたが効果は限定的で良化しないとのこと。当院での触診でも上記の通り頭部に激しい疼痛あり。入念に触診を行うと、疼痛は左耳根部に有意に強いことが判明。麻酔前の評価を行い、飼い主の同意が得られたために全身麻酔下でVOS検査を実施。左耳垂直耳道内の耳垢は軽度であり、耳道粘膜の炎症はなかった。スコープを水平耳道へ進めると、鼓膜の位置で鼓膜が全て欠損し、中耳腔に白色膨隆状の腫瘤を確認。4Fr/5Frの生検鉗子を用いて腫瘤を牽引切除。一度で切除できる腫瘤は小さいため、これを繰り返して腫瘤の90%以上を切除。切除した病変を病理組織検査に提出したところ、病理組織診断は角化亢進を伴う重層扁平上皮の増生で、内視鏡所見から判断すると真珠腫性中耳炎が考えられるとの結果であった。VOS後、約1週間で頭部の疼痛は消失し、元気や食欲は回復。3週後に2回目のVOSを実施

したが、腫瘤の存在した中耳腔の手前に鼓膜様の線維組織が帆状に形成。一部に欠損孔が認められたが、トムキャットカテーテルを挿入した中耳腔の洗浄は特にデブリスの沈着もなく、おそらく真珠腫病変は消失しているようであった。今後も定期的にVOSを行い経過観察する予定である。**症 例②**：キャバリア・キングチャールズ・スパニエル（CKCS）、オス、8歳齢、13kg。

1週間前から頸部周囲の痛みを主訴に他院を受診。触診にて頸部痛と診断され、プレドニゾロン（1mg/kg）が処方されたが効果なしとのこと。当院での触診では右耳周囲の圧痛はあるものの、有意な頸部痛はなかった。耳介は軽度な苔癬化が認められ膿性耳垢による耳漏あり。耳科疾患を疑い麻酔前の評価を実施、飼い主の同意が得られたために全身麻酔下でVOS検査を行った。右耳垂直耳道内には粘糊性のある耳垢が散在し、耳道粘膜は慢性炎症による増生が認められた。スコープを水平耳道へ進めると、白色で弛緩部が膨隆した異常鼓膜が観察された。中耳腔の疾患を疑い、鼓膜穿刺のために予め先端を尖らせたトムキャットカテーテルを作成し、鉗子チャンネルから挿入してVOS下で鼓膜を穿刺吸引。採取されたのは淡茶色に混濁した粘糊性の液体。普通のトムキャットカテーテルに交換して中耳腔を灌流洗浄して終了とした。

採取した中耳腔の分泌物を細菌培養感受性検査に提出したところ、Staphylococcus pseudintermediusを検出。多剤耐性があったが、DOXYに感受性を示した為、術後はピブラマイシンを使用。抗炎症治療としてプレドニゾロン0.5mg/kgを併用。治療経過は比較的良好で、VOS後数日で頭部の疼痛が消失。2週間ほどは耳垢も乏しく良好に経過したが3週ほどで耳漏が再発。現在までに3－4週間隔で計4回VOSを実施しているが鼓膜再生は確認できず、耳道粘膜の改善も軽度であり根治は難しい状況。幸い、定期的なVOSによりQOLは維持できており飼い主の満足度は高い。外耳炎が不可逆的な状態であることから、今後は外耳道切除など外科的介入を検討している。

**症 例③**：フレンチブルドッグ、去勢オス、2歳齢、15kg。

数週間前に耳漏と頭部の痛みを主訴に他院を受診。外耳

炎は幼少期から同院で治療しており、ここ数ヶ月は耳漏が続いているとのこと。他院での診断は頸部痛で、グラピプラント（ガリプラント錠）と抗生剤が処方されたが効果は限定的で良化しないとのこと。当院での触診でも、上記の通り頭部に激しい疼痛あり。入念に触診を行うと、疼痛は右耳根部に有意に強いことが判明。耳介は耳漏により発赤および腫脹が見られ、垂直耳道には膿性耳垢が充満。それ以降の耳道は観察が困難。耳垢培養の結果、同定された細菌はStreptococcusで多剤耐性を示していた。麻酔前の評価を行い、飼い主の同意が得られたために全身麻酔下でビデオオトスコープ（VOS）検査を実施（第1病日）。右耳垂直耳道内には粘糊性のある耳垢が充満しており、耳道粘膜は慢性炎症による耳垢腺の増生が認められた。スコープを水平耳道へ進めると、赤色でドーム状に膨隆した腫瘤が観察された。腫瘤は全周性に水平耳道を占拠している状態。腫瘤に対して、電気スネアを用いて切除。残存する腫瘤に関しては生検鉗子を用いて牽引切除。腫瘤は病理組織検査へ提出。腫瘤以降の水平耳道は犬種特有の狭窄がありスコープの挿入が困難。鼓膜の存在は不明。耳道内の耳垢を全て洗浄、デブリスや毛束を除去して治療を終了。病理組織診断は炎症性ポリープ（非腫瘍性病変）であった。組織像から判断すると中耳炎由来のポリープが考えられるとのことであった。ポリープ切除後、1週間で劇的に右耳の症状が改善。疼痛と耳漏は消失し、耳介の発赤も良化傾向にあった。しかし、第28病日に耳漏が再燃。初回VOSから約1ヶ月後の第32病日に2回目VOSを実施。外耳道の炎症には改善が認められたが水平耳道内にポリープの再発を確認。1回目と同様に電気スネアなどで切除。2回目のVOS治療以降は、臨床症状もなく経過は良好。第78病日に3回目のVOS検査を実施。ポリープの再発はなく、耳道粘膜も良化傾向。その後、1年半が経過しているが、ポリープの再発はない。6ヶ月毎のVOSと、オクラシチニブ（アボキル錠）の投薬を継続している。

### 考 察

人医療では、様々な形態の中耳炎や中耳の奇形、耳管疾患、耳小骨の異常、中耳腫瘍など多くの病態が認知されている。もちろんヒトでは自覚症状があることと、耳道の観察が耳の形状から比較的容易であるため、中耳炎の診断機会が多いことは否めない。一方で犬猫の現状では、外耳炎と中耳炎の鑑別診断も行われないうまま、「難治性外耳炎」として長期治療されているケースも多い。本症例のような誤診例も残念ながら散見される。症例①では、診断が真珠腫性中耳炎であった。比較的稀な疾患であり、外耳道や鼓膜から中耳腔へ浸潤した表皮が増殖して大きくなり、真珠種組織が中耳とその周囲の骨構造を破壊するとされている。好発犬種は報告されていないが、国内では柴犬、シーズー、パグ、フレンチブルドッグなどで報告がある。初期の臨床症状として耳周囲の触診時の痛みが報告されており、進行すると斜頸や眼振などの神経症状や顎関節に関連

した開口障害や開口痛による食欲不振が認められることもある。治療は今回選択したVOSを用いた姑息的切除による保存治療の他、全耳道切除術（TECA）と外側および腹側鼓室包切開（LBO/VBO）が有効とされている。ただし、外科手術の再発率は20-50%との報告もあり、予後には注意が必要である。症例②では、CKCSという犬種でキアリ様奇形/COMS(後頭骨異形成症候群)による脊髄空洞症が遺伝的に多く、頸部痛が認められることも多いため診断には注意が必要である。本症例の診断は慢性外耳炎から進行した続発性中耳炎と考えられるが、おそらくは原発性滲出性中耳炎（PSOM:Primary Secretary Otitis Media）が根本にあったことが疑われる。PSOMはCKCSに代表的な中耳炎である。原因は不明だが、中耳や耳管の機能不全が関与していると考えられている。臨床症状に関しては43例、61耳での報告があり、頭頸部の痛み(64%)、神経症状(25%)、耳の痒み(15%)、外耳炎(15%)、難聴(13%)であった。診断はVOS下での鼓膜穿刺が有効とされており、不透明な粘液の確認が確認される。大きく膨隆した鼓膜弛緩部を確認できれば、概ね診断は確定的とされている。治療は鼓膜切開と中耳腔の洗浄や鼓膜換気チューブの設置が有効であったとする報告もある。治療成績に関する纏まった報告はないが、治療に複数回の中耳腔洗浄が必要であった例も多い。症例③では、疼痛の原因が耳道内の炎症性ポリープであった。炎症性ポリープは非腫瘍性病変であり、猫では鼻咽頭の炎症性ポリープが有名であるが、犬では稀である。犬の耳道内炎症性ポリープは比較的稀であり5例で報告があるが、全例で中耳炎が認められている。本症例は犬種特有の耳道狭窄によって鼓膜や中耳の評価は困難であるため、中耳炎の確定診断はできないが、ポリープの病理組織所見から炎症は中耳由来であることが示唆された。

総括して犬の中耳炎の診断は難しい。理想的には全例でCT/MRIが必要だが、一次診療では様々な制限もあり限界がある。そこで提案したいのが近年普及してきているVOSによる検査および治療である。中耳炎の病態如何では、VOSによる内視鏡的な評価だけでも臨床的な対応が可能 ケースも多い。中耳炎の病態を把握し、臨床症状を理解し、早期での診断例が増えることが望ましいと考える。

### 参 考 文 献

- Little CJ, Lane JG, Pearson GR (1991): Vet Rec., 128(13), 293-296.
- Gotthelf LN (2005): An Illustrated Guide. 2nd Ed, 276-303.
- Hardie EM, Linder KE, Pease AP (2008): Vet Surg., 37, 763-770.
- Greci V, Travetti O, Di Giancamillo M,et al (2011): Can Vet J., 52, 631-636.

1) 森動物病院 〒513-0806 三重県鈴鹿市算所 5-12-11